

秋田大学
日本語・日本文化研修論文

狐の文化
物語の中にあるリアリティ

秋田大学教育文化学部
日本語・日本文化研修留学生
Grigore Ilarion Florin

目次

1 はじめ.....	3
2 過去の狐・狐と神.....	4
3 狐と女らしさ.....	6
3.1 誘惑する女？玉藻の前.....	7
3.2 狐花嫁の典型一葛の葉.....	8
4 狐と男らしさ・与次郎稻荷.....	9
5 結論.....	10
6 参考資料.....	11

きつね ぶんか 狐の文化 1 はじめに

せかいで日本の他にきつね ぶんか 狐の文化があった国がないと思います。そして日本の中できつね いちばんゆうめい どうぶつ ようかい 妖怪のように恐れられて神のように祭られてどこでもきつね のイメージが強いです。昔からしんとうでんとう ぶんか 神道伝統文化によるときつね いなり おお 狐は稲荷大神の使者です。いなり おおかみ のうぎょう かみ 稲荷大神は農業の神だからきつね こめ 狐がよく米のイメージといっしょにふぞく 付属します。日本のでんとうものがたり 伝統物語の中でときどきでく 上品な人物は有名なきつね 狐です。例えばあべ せいめい 安倍の清明と言ういんやうじ 陰陽師の母はくず は い きつね 葛の葉と言うきた 狐です。北からみなみ 南まで、そしてひがし 東からにし 西までどこに行ってもきつね 狐の話があります。ぶんがく 文学やマンガやひとびと 人々の生活にもきつね 狐のかげに出会えます。

ルーマニアはきりすと 教国なので人々はほか かみ ようかい ば 別の神と妖怪とお化けなどを信じていません。そこでどうぶつ まつ 動物を祭るイメージがそんなつよ 強くないと考えます。もちろんむかしばなし 昔話があるのだけれどきつね たぬき ほか どうぶつ 日本の狐とか狸とか他の動物のようににんき 人気もありません。私はでんせつや 伝説や日本人のめいしん 迷信についてもきょうみ 興味があるのでこんな事についてもっとし 知りたいたと思います。なぜ日本できつね 狐がそんなゆうめい 有名ですか。きつね かんが 狐を考える時にどんなかん 感じがありますか。むかし きつね いま きつね 昔の狐と今の狐のどちらがもっとゆうりょく 有力ですか。

それでレポートを二つの部分にわ 割りたいと思います。いちばんめ 一番目の部分にはきつね 過去の狐について書きたいです。じだい 時代によってきつね のイメージはどのようにちが 違いますか。そしてきつね としんせいや 女らしさや男らしさなども書かせていただきたいです。このきつね ぶんか 狐は文化にどうえいきょう 影響しましたか。そして人々の考え方はきつね のイメージにどうえいきょう 影響しましたか。きつね 狐にどんなせいかく 性格を作らせましたか。女らしさと男らしさはきつね 狐にどんなせいかく 性格を付けましたか。きつね 狐とひとびと 人々のたいおう 対応はどうですか。にばんめ 二番目の部分にはきつね としんせいや 女らしさや男らしさなどの関係です。きつね のイメージがどんなにんせい と 男性の性格を描かれていますか。他にも現代のきつね の伝統的な女性イメージからにんせい のイメージに動くことについても書きたいと思います。

私は人々の自然の想像の仕方はとても大事なことだと思います。これを勉強すればその人たちの考え方もっと分かります。その人たちは何で怖がりますか。何で信じますか。なぜこのことにそんなイメージを付けましたか。日本人は昔から今までも本当に 恭 しい民族だと思います。昔の日本人の考え方について動物は動物だけではありません。動物は人に化けて魔術を使って時々人に神様の言葉を持ってきます。そのなかで一番そそられた動物は狐だと思います。狐は全く悪く悪ではないし善でもありません。必ず憎まれているわけではないと同時に好まれているわけでもありません。西洋の国は大抵キリスト教なので自然とか世界の奇跡を忘れてしまいました。

2 過去の狐・狐と神

古代権力の戦いは世知辛かったので人々は二つのグループに分けられました。それは貴族と庶民です。貴族は力を崇拜したので庶民のことについてあまり考えませんでした。Kiyoshi Nozaki(1961)によるとその結果庶民は虐待から逃げ出すために迷信に立ち退きました。その時日本では狐の数が本当に多かったので一番の産物は狐の話が増えたことです。同時に狐に本当に矛盾的なイメージが付きしました。狐は知恵と延命を持っているし魔術も使う事ができるという信念がありました。この信念のおかげで狐のイメージはだいたい二つの主な種類に分けられました。悪霊の狐は野狐と言います、代わりに良性の狐は善狐と言います。この二つの狐の種類は本質的に同じ特徴を持っています。どちらも年をとるとともに尻尾の数が増えます。百年後にで新しい尻尾が花咲き、九百歳になる時にその狐は九尾の狐になって、毛皮も銀色と金色になって世界で行ったことを全部を見聞することができます。

伝説によると白狐は稲荷大神の使者です。日本では稲荷大神は711年から今までも祭られています。この神様は米、酒、お茶、農業、工業、肥沃、刀家事、狐の神です。しかし狐は平安時代からだけ稲荷大神のイメージと一緒に付随します。特別な伝説によるとこの時に都の北のフナオカと言うところで年寄り白狐の夫婦と五匹の子供たちが住んでいました。この家族は自分の

土地を去り、稲荷山の神様の神社に行ってきました。そこで神様に「世界の平和を守るために神様へわれわれの力を貸してあげたい」と言って神様の使者になって祈りました。神様は彼らの真心に本当に心を動かされたので彼らの祈りを許可しました。雄狐にオススキの名前を付けて、雌狐にあこまちの名前を付けてくれました。この時から狐が大神稲荷の使者になっていました。

九世紀に狐のイメージが茶枳尼天のイメージと付随しました。この菩薩はヒンズー教の悪魔のイメージに根ざしています。この悪魔はオカルトパワーを持ちし人々の死亡時間を知り人の心臓を食べます。日本には茶枳尼天の信念は真言宗から入って来たと言われています。平安時代の凋落に狐のイメージが付随して辰狐王菩薩の名前を付けられました。その時に狐つきと言う現象がよく起こったので人々は誰かが茶枳尼天の力を使って嫌いな人を呪うと考えました。半裸体の女の人はよくこの呪いの被害者と思われていました。これと茶枳尼天の白狐に乗るイメージにはポピュラリティーがあります。このことが特に野狐と茶枳尼天の付随したイメージの理由です。

私にとって一番面白いところはこの狐の二重性だと思います。狐は同時に聖であり邪悪でありますけれど二つの特徴は女の性格を描いて使いました。西洋で女のイメージに大体二つの性格が付いていて、それは天使とデーモンです。同じように日本では狐のイメージを使ったと思います。前の茶枳尼天と大神稲荷は良い例証だと思います。もちろん大神稲荷は中性の神だけれど狐のイメージはほとんどは女の部分と付随しています。そしてこの女の部分はどきどきウガノミタマノカミのイメージと付随しています。ウガノミタマノカミ(女)とウガノミタマ(男)は神道の農業と米の神でよく大神稲荷のイメージと一緒に付随した神です。狐はたぶんよく米の田の近くに狩りをしたので田を守る物のイメージが付けられました。その結果神様のイメージと肥沃のイメージとも付随したと思います。この一般的な狐のイメージは人々の、特に女の矛盾的な性格を描くために使われました。このことについて次の部分でもっと具体的に書きたいと思います。

3 狐と女らしさ

狐のイメージによく女性の^{とくちょう}特徴が付けられました。これは日本の場合^{ばあい}だけでは中国や韓国や^{いんど}印度などそしてヨーロッパでも起こっています。これは文化の結果だと思えます。例えばヨーロッパで狐が^{うわきもの}浮気者のイメージを持っています。狐と言う動物はそんな^{こわ}怖くない動物で更に人々は狐について大体^{じょうひん}上品なものとか弱々しいとかミステリアスなイメージなどを持っています。ルーマニアの伝説と文学で狐はほとんど女性です。例えば Ion Creangă(1880)と言う作家の文学作品があります。この作品によると狐は熊に「尻尾を使って^つ釣りをした」と言われました。熊はその夜^{くま}湖^{みずうみ}に行き釣りのために尻尾を入れましたけれどその夜水が氷ったので引き出す時に尻尾が切れてしまいました。実は狐が話した魚は人から^{ぬす}盗んだ魚です。ルーマニアで力を使わないで頭を使って欲しいことを得るイメージはよく狐のイメージと付随します。そしてルーマニア語には言語性別があり狐の語彙は女性です。これは狐に女性のイメージが付随した理由だと思えます。また狐は実に色々な社会の女性のイメージに付随しています。どんな社会でも女のイメージにはいつも二つの^{ひょうげん}表現があります。それは^{てんし}天使と^{ゆうわく}誘惑する女です。けれどこの中で一つだけは一番一般的なイメージです。この^{とくちょう}特徴は人間の^{すがた}姿をした化け物と動物ノ姿化け物にもありますけれど狐については同時にこの二つのイメージがあるので珍しいと思えます。もちろん二つある場合も起こりますけれどその時に一つのイメージだけはもっと強くなります。日本の場合この二つのイメージの^{ひりつ}比率は大体^{ひと}等しいと思えます。

3.1 誘惑する女？玉藻の前

先に書いた部分で狐は女性の二つの特徴を描いていると書きました。それは^{ゆうわく}天使と^{たくさん}誘惑する女性です。日本の古典と文学で有名な狐の例は^{たくさん}沢山あるけれどこの中で玉藻の前と葛の葉と言う狐は一番有名だと思えます。一番^{じゃあく}邪悪な狐は^{たまも}玉藻^{まえ}の前と言う狐だと思えます。伝説によるとこの狐は^{きゅうび}九尾でした。九尾の伝説は印度から中国と韓国と日本までに広がったけれど日本ではこの九尾のイメージがちょっと変わりました。^{たいりく}大陸アジアで九尾は^{ただけ}猛々しいイ

メージを持っていました。例えば韓国で九尾は人々を狩してその人の肝臓を食べたと言われました。日本ではこの外国からの情報は普通の人々にあまり広がらなかったのが九尾のイメージの変化は大体貴族の文化の結果です。このおかげで九尾のイメージはそんな激しいものではなくなりました。

玉藻の前の話は室町時代に始まりました。時代によってこの狐の話が変わりましたが大体主な側面が残りました。室町時代に近衛天皇の治世で不思議な女性の影に出会いました。その女は玉藻の前と言いました。うわさによるとこの玉藻の前の体からいつも素敵な香りが出て来て何をしても服の姿がいつも奇麗でした。二十歳に見えたのにとっても賢かったです。どんな主題の質問にもいつも答えました。近衛天皇は玉藻の前を愛していましたが、しばらくして病気になりました。毎日弱くなり沢山の医者や僧侶に相談をしたけれど誰も病気の理由が分かりませんでした。それでアベノヤスチカと言う陰陽師に相談しました。彼は玉藻の前の実の氏名を表しました。この時にこの時代の二人の有能な武士カズサノスケとミウラのスケが玉藻の前を狩する任務をもらえました。玉藻の前は彼ちから逃れたけれど自分の死が見えたのでミウラノスケの夢に出て命乞いしました。ミウラノスケが断た次の日に玉藻の前を殺しました。玉藻の前の体が殺生石になって、彼女の魂が石に同化しました。伝説によるとこの石に触れたらどんな人物でも死にます。

玉藻の前の伝説には色々なバージョンがあります。バージョンによって天皇とか陰陽師とか違いますけれど伝説の設計はほとんど同じです。時々天皇様を愛してる話も出て来たけれどこの誘惑するイメージはもっと強いと思います。玉藻の前は古典時代の女性の希望を描いていると思います。その希望は男性の存在の外で自分の存在を生きることです。古代日本の女性は男性の存在を通じて知られていました。清少納言とか藤原道綱の母とか他の有名な女性も実際の名前は今でも分かりません。この女性と他の女性にとっても玉藻の前は自由の理想です。玉藻の前は古代の女性の理想と男性の理想を組み合わせていると思います。それは女性の姿で男性の知性を持っていることです。その理由で玉藻の前が男女にとって重要な存在になっていました。女性に関して自由の夢になり、男性に関しては未知の恐怖と言う意味を持っていると思います。この狐は古代日本人の色々な考え方を描くことができたけれど近代の考え方についても同じことが言われます。

3.2 狐花嫁の典型一葛の葉

玉藻の前は女性の悪質なイメージが描かれているのと反対に葛の葉は女性の善しとした性格が描かれています。この葛の葉と言う狐があ有名な安倍清明と言う陰陽師の母と言われています。安倍清明は安倍仲麻呂と言う歌人の後胤でした。父親は人間だけれど民衆文化によると母親が葛の葉と言う狐でした。このおかげで彼は沢山魔法能力を持っていると言われました。安倍清明の話は特に江戸時代に今昔物語や平家物語など色々な本に出ています。この本では葛の葉の伝説もありました。この伝説によると清明の父は信太神社に行く中で薬を作るために狐を狩する男に会いました。彼はこの男と戦って傷を負ったけれど捕獲された白狐を放しました。そのあとで美しい女性に出会いました。彼女は彼家に一緒に帰りました。彼女は彼と結婚して息子が生まれました。この女性は葛の葉でした。そして息子は安倍清明でした。数年後菊を見るの裏した時に清明が母の尻尾の先端を見つけて葛の葉の実際の身元が現れました。その後で葛の葉は家を立去ってけれどその前に夫に和歌を送っていました。「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」この和歌で葛の葉は夫に信太森に来てと頼んでいます。そこで葛の葉の実際の身元、信太神社の神としてが現れました。葛の葉は清明に獣の言葉が分かる性能をあげてそして消えてしまいました。

葛の葉は玉藻の前の反対だと思います。二人を比べたら葛の葉は善良な性格を持っています。彼女は大御の由緒と義理堅い性格も持っています。けれど他の女性の人物と同じで葛の葉が助けてくれた人と結婚するのは彼女に典型的なキャラクターを作っていると思います。残念なことに葛の葉は柔順な女性の軌範です。その前に男の存在だけで自分の存在を確認した女性です。玉藻の前の反対に葛の葉は女性の脆弱な性格を描いて同時に柔順な部分も描いていると思います。葛の葉は花嫁の典型的なので彼女は沢山力を持っているのに主人公を支援キャラクターです。このアイディアは浮世絵でよく見ることができます。例えば歌川国芳や月岡芳年などの作品で葛の葉はいつも美女の姿をしているけれど彼女の影はいつも動物の姿です。これを見ると私は「どんな力を持っていても女はいつもただの女です」という感じがします。これは始めて葛の葉と玉藻の前の話に読んだ時にもらった印象です。神

と妖怪ようかいはどんな姿をしても女性のキャラクターはいつも負けています。この結果はたぶん日本人の女性に関する意見の結果です。数少ない女のキャラクター以外どんな時代でも女性は強い性格を持ってないと思います。理由は女性がいつも男性に尽くすと言われたのでこの意見は人間の女性だけではなく妖怪ふずいにも付随していました。

4 狐と男らしさ。与次郎稲荷

日本民衆文化みんしゅうぶんかのなかに玉藻の前とか葛の葉とかたくさん他の女性の狐キャラクターがあると思います。しかし男性の狐キャラクターは珍しいめずらと思います。この男性の狐のなかでとても人気があるのは与次郎稲荷よじろういなりと言う狐です。他の男性の狐はあまり名前を持ってないので与次郎が名前を持っているのは彼の人気しょうこの証拠だと思います。与次郎稲荷は東北地方で特に秋田県と山形県で知られています。この二つの県で与次郎稲荷の神社が建てられました。

「のんびり」と言う秋田に県庁が発行するフリーペーパーの第二巻でこの与次郎稲荷についての記事が書かれました。記者たちは千葉美栄だいにかんと言う人にインタビューしました。千葉美栄さんは秋田県の千秋公園にある与次郎稲荷神社の守り人です。千葉さんの話によると昔千秋公園の山にたくさん狐が住んでいました。けれどある日人々がこの地域ちいきおさしろに収まって城を作り始めました。自宅を失うことを恐れ一匹の三百年の狐が佐竹義信さたけよしのぶと言う大名様だいまようさまきょうさまに「卿様につ尽く代わりに卿様の城に泊まらせてください」と懇願こんがんしました。大名様は同情どうじょうして狐に仕事をくださいました。その時から与次郎稲荷が佐竹義信様の飛脚ひきやくになりました。しかしこの狐は普通の狐ではありません。秋田から江戸までを六日で走って到着とうちやくすることができました。残念だけれど伝説によると与次郎稲荷が山形県で狩人の罠かりびとわなに落ちて殺されてしまいました。佐竹義信様はこのことについて本当に悲しかったので与次郎稲荷神社を建てられました。

前に述べたように男性の狐が珍しいめずらと思います。狐と女らしさの概念がいねんに強い関連があるので男性の側面が無視されています。狐が男性の姿に化けるのはまれでこの狐はマイナーなキャラクターです。この狐の目的は主人公とか他の主なキャラクターをサポートすることです。女性狐ことと異なり男性のは人の姿にあまり化けません。そして同じように男性の狐はそんな印象いんしょうてき的な力を持っていないと思います。陰陽道によるとこの世の中に二つのエネルギーがあります。それは陰と陽です。「陰」は夜や妖怪や死去や女らしさなどのエ

エネルギーです。「陽」は日や神や命や男らしさなどのエネルギーです。女性は陰陽の陰と関連するけれど男性は陽エネルギーと関連します。妖怪と化け物は生き残るために陰エネルギーを使うので陽に関連する男性は不利益です。女性狐は都の狐です。代わりに男性狐は田舎の狐です。これは安全の違いの結果だと思えます。昔田舎はそんな安全ではないのでたぶん人々は無意識に女性より男性のほうがもっと強いと思ったので不安に克服するためにこんなキャラクターを作りました。安全な貴族の都でもあまり心配がなかったのもっと上品なイメージを強調しました。

5 結論

世界で日本のように狐が好まれる場所がないと思えます。昔から狐はたくさんイメージが描かれました。農業の神と妖術の神と恐ろしい妖怪、綺麗な女性、健気な男性、神の使者、賢明の象徴そしてたくさん他のキャラクターも描かれました。狐のイメージを使って色々な世界のことを説明しました。狐が色々な大作恋物語や人情話や怪談の主人公になりました。その昔話から玉藻の前や葛の葉や与次郎稲荷だけではなく他にもたくさんの人物が出て来ました。この人物は今でも日本の世間に影響しています。文学、アニメ、マンガ、商業のなかで狐のイメージが見えます。そして新しいことも描かれています。近代の狐は日本の過去と現在を繋げる糸だと思えます。今後も将来でも狐は日本人の価値を持ち続きます。

参考文献南犬

- Nozaki, Kiyoshi (1961) 『*Kitsune-Japan`s fox of Mystery, Romance and Humour*』
- The Hokuseido Press
- Hearn, Lafcadio (2005) 『*Glimpses of Unfamiliar Japan*』 Project Gutenberg
- Goff, Janet (April 1997) 『*Foxes in Japanese culture: beautiful or beastly?*』-Japan Quarterly
- James, Grace (2011) 『*Japanese Fairy Tales-Tamamo, the fox maiden*』
- Creanga, Ion (1880) 『*Ursul păcălit de vulpe*』
『のんびりーますぐ秋田のくらし』 vol. 2 秋田県『観考文化スポーツ部観考
戦略課イメージアップ推進室』
『京都大学公認ウェブサイト』
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit-e/otogi/tamamo/tamamo.html>
『*Kitsune, Kumiho, Huli Jing, Fox. Fox spirits in Asia and Asian fox spirits in the west*』 -<http://academia.issendai.com/fox-index.shtml>